令和２年度まほろん特別展

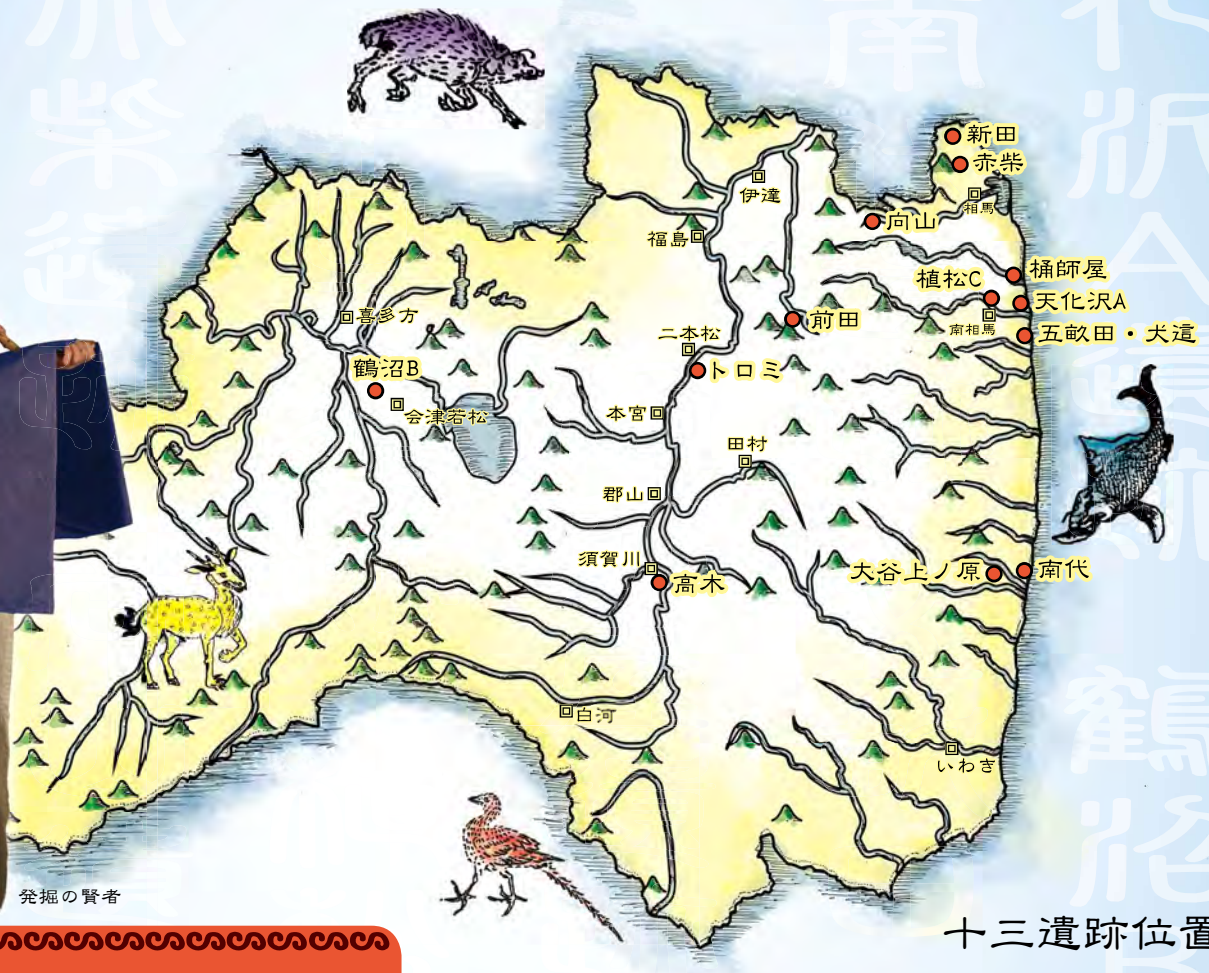
解説資料

ふくしま発掘最前線

―十三遺跡記―

私と一緒に
十三の遺跡を巡り
発掘調査で
わかったこと
わからないことを
確認していきましょう

発掘の賢者



十三遺跡位置図

なぜ遺跡を調査するの？

遺跡は、人が地面に残した暮らしの跡です。私たちは、遺跡を調べることで、文字や絵画だけでは分からなかった過去の人々の暮らしを知ることができます。ただし、遺跡が持つ情報は、建物などの跡（遺構）や使われていたモノ（遺物）の関係を丹念に記録しながら掘り出す発掘調査をしなければ得られません。このため、道路や堤防などの建設工事で遺跡が破壊される場合には、失われてしまう情報を後世に残していくために発掘調査が必要となります。東日本大震災から9年、福島県では、復興関係の建設工事に伴い多くの遺跡で発掘調査が実施されました。今回の展示では、この間に調査した遺跡の内、13箇所の遺跡発掘調査の成果を紹介します。

試掘調査

発掘調査

整理作業

発掘調査報告書

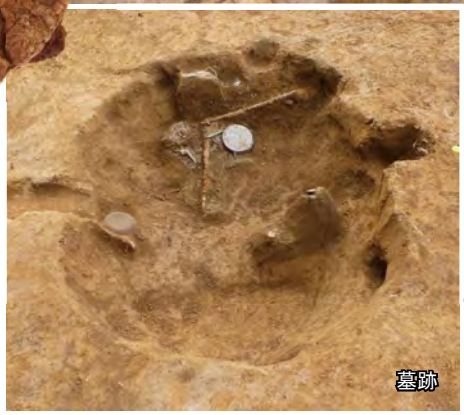
向山遺跡

Mukaiyama site

所在地　相馬市東玉野字向山
調査原因　一般国道115号線相馬福島道路建設
調査年　平成25・26年
時代　縄文・平安・江戸

調査区遠景（東から）

羽口（はぐち）
木炭の放射性炭素年代測定により、17世紀後半の操業と推定された製鉄炉跡から出土した送風管です。



阿武隈高地の北部に奇岩をもって聳え立つ霊峰霊山。その南麓をかすめて延びる中村街道は、福島と相馬中村を結ぶ主要幹線として古来より人の往来が盛んであった。

中村街道の南に位置する丘の上に向山遺跡がある。この遺跡からは江戸時代の製鉄炉跡と墓跡が見つかった。相馬藩領の西端にあたるこの地では、わざわざ海岸の砂鉄を原料に鋳物用の鉄素材が作られていた。墓跡からは、初期の大堀相馬焼とともに、鏡や火箸が出土した。

遺跡は、相馬藩辺境に生きた人々の営みの断片を伝えてくれる。

蓬莱文鏡（ほうらいもんきょう）墓跡から出土した銅製和鏡。15～16世紀の所産で、伝世品と考えられます。

阿武隈川の長大な流れは、その両岸に住まう人々に、肥沃な耕地をもたらすとともに、中通り地方の南北を結ぶ物流の基幹としての役割を近代まで担ってきた。

阿武隈川の中流域に安達という地域がある。阿武隈川に西から注ぐ杉田川流域に郡府があり、両河川が合流するやや北側、阿武隈川の東岸にトロミ遺跡は立地する。遺跡からは、鎌倉時代の掘立柱建物跡が複数見つかり、使用されずに埋め戻された井戸跡などから、饗宴用の食器や刀装具、高級輸入磁器などが出土した。河川流通の拠点を抑えた安達の有力武士の邸宅であろうか。その者の名は、杳として知れない。

トロミ遺跡

Toromi site

所在地　二本松市北トロミ・南トロミ
調査原因　阿武隈上流河川改修
調査年　平成23・24年
時代　縄文・古墳・奈良・平安・鎌倉

鞘尻金具（さやじりかなぐ）
13世紀後半の井戸跡から出土。鞘の先端に取り付ける銅製の飾金具で、菊花状の円形金具と雲形状の透かしのある金具で装飾されています。

青磁連弁文碗（せいじれんべんもんわん）
13世紀に南宋の官窯で製作されたと考えられる高級輸入磁器。蓮華の刻文と空色の釉薬が特徴で、当時の有力者でなければ持てない逸品です。

火打金（ひうちがね）
13世紀後半の建物の柱穴から出土。

調査区遠景と推定建物群（南から）

鶴沼Ｂ遺跡

Turunuma B site

所在地　会津若松市高野町中沼字鶴沼
調査原因　会津縦貫北道路建設
調査年　平成25・26年
時代　平安・江戸

鋤形木製品
（すきがたもくせいひん）
9世紀後半の流路跡から出土。用途不明です。

人面墨書土器
（じんめんぼくしょどき）
9世紀後半の流路跡から出土。まじないに使われたと考えられます。

調査区遠景と高野地区平安時代遺跡郡（北から）

土手状遺構

会津盆地中央の氾濫原が人々の居住地となったのは、鉄の農具が普及した奈良・平安時代である。

鶴沼Ｂ遺跡は、そういった氾濫原に立地する遺跡である。平安時代の流路跡の中に、杭や蔦で補強された土手状の遺構が見つかっている。不安定な足場を強化する工夫であろう。流路跡からは、文字や記号が書かれた土器や様々な木製品が多数出土している。北につづく西木流Ｄ遺跡・西木流Ｃ遺跡、南東の鶴沼Ｃ遺跡・西坂才遺跡では、建物跡群が見つかっており、これらが道で結ばれて、一体の郷を成していたのだろう。

南代遺跡

Minamidai site

所在地　楢葉町大字下繁岡字南代
調査原因　県道広野小高線整備
調査年　平成26・27・28年
時代　弥生・奈良

阿武隈高地の山体は、大部分が花崗岩類でできている。花崗岩に含まれる砂鉄が分離され、川を下って海に出て、波に洗われ浜に溜まる。奈良時代から平安時代にかけて、浜通り地方では、この砂鉄を原料にした鉄素材生産が盛んに行われた。

南代遺跡はそのような製鉄遺跡の一つである。井出川北岸の小高い丘の上の遺跡からは、奈良時代の多様な製鉄炉跡が見つかり、技術導入期の試行錯誤がうかがわれる。また、刀を鉄滓で被覆する行為が見られたほか、ある炉跡では、炉内に4本の通風管を入れる行為が確認された。いずれも廃炉に際して行うまじないなのであろうか。

通風管が詰め込まれた製鉄炉跡

調査区遠景（北から）

鉄刀（てっとう）
8世紀中葉～後葉の製鉄炉跡から出土。製鉄炉跡からの出土は極めて珍しい例です。

鉄刀が出土した製鉄炉跡

桶師屋遺跡

Okeshiya site

所在地　南相馬市鹿島区北右田字桶師屋
調査原因　農山村地域復興基盤総合整備
調査年　平成28・29年
時代　古墳・奈良・平安・室町・江戸

竪穴住居跡（５世紀前半）から出土した土師器

石製模造品（せきせいもぞうひん）
5世紀前半の竪穴住居跡から出土。
剣・鏡・勾玉があります。

調査区遠景と居館跡推定復元（北西から）

万葉歌人笠女郎の歌で有名な真野川流域は、太古からの人々の営みが追える地域として知られている。『先代旧事本紀』という書物によると、古墳時代の終り頃、この地は浮田国造と呼ばれる豪族が治める地であったようだ。

真野川北岸の広大な氾濫原のただ中に細長く延びる微高地があり、その上に桶師屋遺跡は立地する。遺跡からは、古墳時代中期の濠と柵に囲繞された竪穴住居跡群が見つかった。鍛冶の跡や多数の祭祀用石製模造品が出土することから、この地を治めた豪族の居館であった可能性がある。浮田国造との関係が気になる遺跡である。

五畝田・犬這遺跡

Goseta Inubai site

所在地　南相馬市原町区雫字五畝田・犬這
調査原因　農山漁村地域復興基盤総合整備
調査年　平成27年
時代　縄文・弥生・古墳・平安

ガラス小玉・管玉（こだま・くだたま）
4世紀後半の竪穴住居跡から出土。
管玉は、蛇紋岩製。

浜風が強く吹き付ける海抜８ｍのなだらかな丘の上に、その遺跡はある。

五畝田・犬這と呼ばれるその遺跡では、大小19軒の竪穴住居跡から成る古墳時代前期の集落跡が確認された。１軒の住居跡から、ガラス小玉２点と石製管玉１点が出土した。墓跡から出土することの多いこれらの宝飾品が、生活の場である住宅から出土するのは大変珍しい。

日本でガラスの生産が始まるのは、飛鳥時代。それ以前のガラス素材は、すべて舶来もので、当然手に入れることは難しい。空の色と海の色のガラス小玉、そして岩の色の管玉、この地に住んだ人々は何を思いこれらを遺跡に残したのか。

調査区遠景と古墳時代前期の集落跡（南東から）

竪穴住居跡（４世紀後半）
建て替えにより、壁の位置が広がっています。

『魏志倭人伝』によると、弥生時代の後期に当たる時期、倭国は長い間戦乱状態であったという。遺跡の調査成果から、概ね関東・中部地方以西の話であるらしい。

それでは福島県域はどうであったか。倭国に含まれていたかどうかは不明であるが、弥生時代後期の遺跡は極めて少なく、集落遺跡となると数えるほどしかない。阿武隈川西岸に沿った微高地上に立地する高木遺跡は、弥生時代後期の集落跡の様子がうかがえる稀有な遺跡である。墓域を中心に数軒の住居が散在する。そこには、王も囲郭も存在しない。貧しくとも平和なムラの姿が想像できる。

弥生土器広口壺
（やよいどきひろくちつぼ）
2世紀後半。墓跡から出土。

調査区遠景と弥生時代後期の集落跡（東から）

竪穴住居跡（２世紀後半）と出土土器
久慈川流域の弥生土器が持ち込まれました。

高木遺跡
Takagi site

所在地　須賀川市浜尾字高木
調査原因　阿武隈川上流河川改修
調査年　平成 27 ～ 30 年
時代　弥生・古墳・奈良・平安・室町

天化沢Ａ遺跡
Tengasawa A site

所在地　南相馬市原町区北泉字天化沢他
調査原因　農山漁村地域復興基盤総合整備
調査年　平成 26・27 年
時代　弥生・奈良・平安

石庖丁（いしぼうちょう）
紀元前1世紀頃。未完成品（上）完成品（下）。

住居跡（紀元前１世紀頃）

調査区遠景（東から）

弥生土器甕（やよいどきかめ）
紀元前1世紀頃。横倒しに埋設されていました。

埋甕（紀元前１世紀頃）

相双地区の遺跡で目にする灰色の石がある。恐竜が地上で繁栄するよりずっと昔、古生代の海の底に降り積もった細かい泥が長い年月をかけて岩石となったものである。「粘板岩」と称するこの石を利用して、弥生時代中期の人々は、稲の穂を摘む石庖丁という道具を盛んに作った。天化沢Ａ遺跡も、そういった石庖丁の製作が行われた遺跡の一つである。低地に面した小高い丘の頂や斜面中腹の平らな場所のいくつかから、各工程の石器の未完成品が出土した。家族単位で分散して石庖丁を作っていた様子がうかがえる。

調査区遠景（南東から）

植松Ｃ遺跡

Uematsu C site

所在地　南相馬市原町区上北高平字植松
調査原因　県道浪江鹿島線整備
調査年　平成28・29年
時代　縄文・平安

考古学の世界では、ゴミ捨て場を遺物包含層と呼び、調査の有力な対象としている。なぜなら、良好な遺物包含層は、遺跡を残した人々の生活復元の材料を、豊富に提供してくれるからである。

植松Ｃ遺跡は、縄文時代中期前葉の遺物包含層が見つかった遺跡である。新田川北岸の小高い丘の上にあり、浅い谷に面した斜面から夥しい量の土器や石器が出土した。土器や石器を多量に含む土からは、当時の人々が食べていた獣や魚や鳥の骨が残っており、多様な食材の存在が想定できる。ゴミ捨て場を残した人々の集落は不明であるが、おそらく斜面を登った丘の頂上にあることが推定できる。

動物遺体（どうぶついたい）
これらの他、鯛や鯉などの魚類の骨や小型哺乳類のアゴの骨も見つかっている。

縄文土器深鉢
（じょうもんどきふかばち）
紀元前3,300年頃。遺物包含層から出土。

縄文土器深鉢
（じょうもんどきふかばち）
紀元前3,200年頃。遺物包含層から出土。

遺物包含層土器出土状況

新田遺跡

Shinden site

所在地　新地町福田字新田
調査原因　常磐自動車道建設
調査年　平成26年
時代　縄文・江戸

大型住居跡（おおがたじゅうきょあと）
紀元前4,100年頃。同時期の住居跡としては、県内最大規模の長軸長13.2mを測ります。

調査区遠景と縄文時代前期前葉の集落跡（北から）

漆容器（うるしようき）
紀元前4,100年頃。遺物包含層から出土。土器の内面に漆の塊が付着しています。

土偶（どぐう）
紀元前4,100年頃。土製の人形。遺物包含層から14個体が出土している。

十字架のような形をした土偶がある。顔の位置には穴があり、腕を横に広げている。胸の位置にはボタン状の粘土を貼り付けて乳房だけが表現されている。土偶が人の形を獲得する以前の姿である。この土偶は新田遺跡から出土した。遺跡は、宮城県境の地蔵森山から東に延びる尾根上に位置する。尾根の頂の平坦な空間を取り囲むように、縄文時代前期前葉の竪穴住居跡が８軒見つかっており集落を形成していた。集落跡の北側斜面には、遺物包含層があり、先述した土偶をはじめ、たくさんの土器や石器が出土した。土器の底に残された物質の分析から、漆の使用も明らかになっている。

礫群（れきぐん）
紀元前20,000年頃。赤柴遺跡では、この礫群が5箇所見つかっています。

※本展示では、以後の時代表記とそろえるために後期旧石器時代を旧石器時代後期と読み替えて表示しています。

赤柴遺跡
Akashiba site

所在地　新地町駒ヶ嶺字赤柴・杉目字飯樋
調査原因　常磐自動車道建設
調査年　平成23・24年
時代　旧石器・縄文・平安・江戸

礫群と石器集中部の分布状況（南東から）

土器が発明される前の人々は、どんな調理をしていたのだろうか？その問いに答えてくれそうな遺構が赤柴遺跡で見つかっている。浜通り地方北部の広く平らな丘の上にあるこの遺跡からは、旧石器時代後期後半の礫群と呼ばれる焼けた拳大の河原石のまとまりが検出された。焚火で高熱にした石の上に、葉に包んだ魚や肉などの食材を並べ、皮や土で覆って蒸し焼きにした跡と考えられている。調理場の横には、石の屑や石器が散らばる石器集中部と呼ばれる石器製作の跡も見つかっている。石器には、獲物を捕るための尖頭器も出土している。篦鹿や羆などの、本州では絶滅してしまった動物に舌鼓を打っていたのであろうか。

調査区遠景（南から）

有樋尖頭器
（ゆうひせんとうき）
紀元前20,000年頃。先端に樋状の特殊な加工が加えられた槍先と考えられる石器です。

大谷上ノ原遺跡
Oyauenohara site

所在地　楢葉町大谷字上ノ原・山根
調査原因　常磐自動車道建設・整備
調査年　平成11・12・20・22・28・29・30年
時代　旧石器・縄文・奈良・平安

旧石器時代後期後半の石器
紀元前20,000年頃。先端が欠けていますが尖頭器です。写真の石器集中部から出土しました。

石器集中部の石器出土状況

旧石器時代後期後半の石器
紀元前25,000年
ナイフ形石器（左）、切出形石器（右）。

今からおよそ３万年前、鹿児島湾にある姶良カルデラが噴火し、膨大な火山灰を日本列島に降り撒いた。ＡＴ（姶良丹沢火山灰）と呼ばれるこの火山灰を含む土層は、旧石器時代後期の年代を考える基準となっている。

大谷上ノ原遺跡は、井出川と木戸川に挟まれた広大な段丘の上にある。遺跡では、１１箇所の石器集中部と１箇所の礫群を検出した。石器集中部ごとの石器の組み合わせは、ＡＴ降下前、降下直後、さらにその後など、複数時期を確認できた。獣を追って移り住む旧石器時代の人々にとって、大谷上ノ原遺跡は、住むのに好ましい土地であったのだろう。

調査区遠景（南から）

旧石器時代後期前半の石器
紀元前30,000年頃。局部磨製石斧（左）、ナイフ形石器（右）。

前田遺跡

Maeda site

所 在 地　川俣町大字小綱木字前田
調査原因　国道114号線改良
調 査 年　平成30年～調査中
時　　代　縄文

丸木弓
（まるきゆみ）
紀元前
2,800年
頃の流路跡
から出土。
このよう
な弓が多
数出土し
ています。

火鑽臼（ひきりうす）
紀元前2,800年頃の流路跡から出土。
火おこし道具としては、国内で最古の
例です。

調査区遠景（北西から）

流路跡の自然遺物と木製品出土状況（紀元前２，８００年頃）

漆塗木製杓子把手出土状況（紀元前２，８００年頃）

漆塗土器出土状況（紀元前２，８００年頃）

縄文時代後期・晩期の面の調査状況（北東から）

令和２年度まほろん特別展

ふくしま発掘最前線

－十三遺跡記－

まほろん
福島県文化財センター●白河館

見て・触れて・考え・学ぶ　体験型フィールドミュージアム

福島県文化財センター白河館（まほろん）
開催期間　2020年6月6日（土）～8月30日（日）
編集・発行　公益財団法人福島県文化振興財団
〒961-0835　福島県白河市白坂一里段86
TEL：0248-21-0700　FAX：0248-21-1075
ホームページ　まほろん　検索　（2020年6月6日発行）

前田遺跡はとてつもない遺跡である。縄文時代中期の終わり頃から晩期の初めごろまで、繰り返し集落が営まれ、時に墓域となっていたらしい。特筆すべきは、漆器をはじめとする木製品や動植物遺体などの有機質の残りの良さだ。この遺跡の研究は、今後の縄文時代観を変えることだろう。このような遺跡は、県内は元より、全国でも極めて希少である。しかし、この遺跡は道路整備に伴い失われることとなる。発掘調査は二度とやり直すことができない。せめて少しでも多くの情報を後世に残せるよう、発掘調査員は、今日も遺跡に臨んでいる。